今月の特集

灯を灯せ！

江戸から東京へ 巨大都市のルーツを探る

西の丸大手門（二重橋）

日本の首都である「東京」は、1603年に徳川家康が幕府を開いてから首都として発展を続け、現在では1395万人（令和2年1月1日現在・東京都HPより）が暮らす世界有数の大都市となりました。また日本の政治、経済、文化などの中心でもあります。

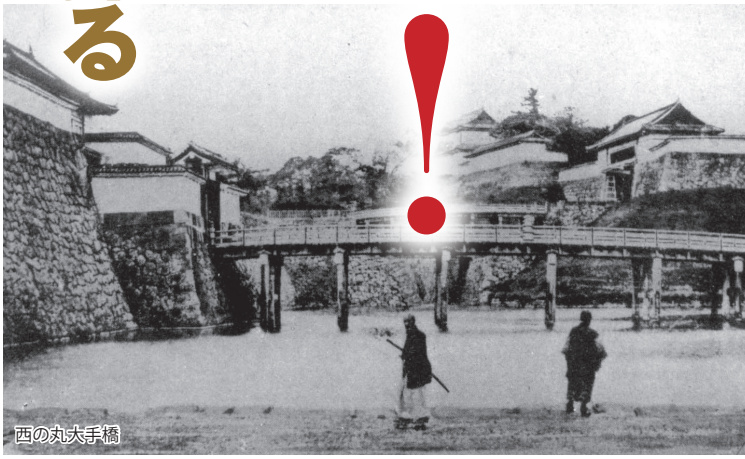
しかしこの東京、徳川家康が最初にこの地にやってきたときは、葦が生い茂る貧しい漁村にすぎませんでした。それがなぜ世界屈指の大都市へと変貌を遂げたのか、今回は先人たちが遺した痕跡を探りながら、首都・東京の歴史をたどってみたいと思います。

太田道灌が江戸城を築城

東京の歴史は日比谷の入り江の際に、小さな城が築かれたことから始まります。城というより砦というべきかもしれません。これが江戸城です。

江戸城を最初に築いたのは扇谷上杉家の武将・太田道灌でした。室町時代中期の1457年（康正3年）、応仁の乱が起こるちょうど10年前のことです。その道灌がお家争いから暗殺されると、江戸城は何度か城主が替わったあと空き家同然となり、時間が流れていきました。

徳川家康がこの江戸城に入城したのはそれから百年以上が過ぎた、1590年（天正18年）のことでした。


西の丸大手橋

家康はこの前年、豊臣秀吉の小田原攻めに参加し武功をたてます。その褒美として秀吉から北条氏の領地である、武蔵・相模・安房・上総・常陸・上野・下野などの広大な領地を与えられました。貰うだけならよかったのですが、家康の旧領である駿河・遠江・三河・甲斐などを取りあげられたのです。

これは秀吉の策略で、家康の力を恐れたため、政治・経済の中心であった近畿圏から、遠く関東へと追いやったのだ、といわれています。

このときの江戸は、たしかに京や堺から遠く離れた東国の貧しい漁村にすぎませんでした。しかし太平洋から大きく入り込んだ江戸湾（東京湾）は波が穏やかで、船舶の発着には申し分ない地形でした。またそこは江戸前と呼ばれる豊富な漁場です。後ろには武蔵・上野・下野と続く広大な平野が広がり、田畑として整備すれば莫大な収穫があがります。

類稀なる政治家・徳川家康は、そのことは十分承知していたはずです。

江戸を建設する徳川家康

入城してすぐに家康は動きました。江戸の大改造がはじまったのです。

画像提供：探検コム　https://tanken.com/

まず江戸の土地を広げるために、大規模な埋め立て工事を行いました。小高い丘陵であった神田山を切り崩し、その土で日比谷の入り江を埋め立てました。切り崩された神田山の跡地は平坦な住宅地として生まれ変わりました。いまも残る「神田駿河台」の地名は、そこにかつて丘陵があった名残だといわれています。

江戸城の改築にも着手します。それまでの本丸・二の丸の改修にくわえ、西の丸・北の丸などを増築。また城の周辺には武家地・寺社地・町人地を設けていきました。

さらに運河の建設も行っています。平川は江戸市中に物資を運ぶ水路として、また江戸城を守る濠としても活用されました。これが現在の神田川です。こうして江戸の町の建設は着々と進んでいったのです。

これらの工事によって江戸の町は爆発的に人口が増えていきました。

１６０３年（慶長８年）、徳川家康は関ヶ原の戦いの勝利によって征夷大将軍に命じられると、この地に江戸幕府を開きます。さらに大規模な江戸城の修復工事にも着手しました。「手伝普請（天下普請）」といわれる軍役によって、全国各地の大名に江戸城の改修を命じました。

大阪の陣の翌年、家康がこの世を去ってからも、二代将軍・秀忠と三代将軍・家光によって江戸城の大改築ならびに江戸の町の整備は続けられました。

増大する江戸市民の飲料水を確保するために、井之頭池を水源とする神田上水を、また玉川から四谷までの玉川上水を建設したのもこの頃です。これは当時のロンドンの上水道設備を凌ぐ、世界最高水準の給水システムでした。現在はＪＲの駅名にもなっている「水道橋」は、ここに神田上水の水路橋があった名残だといわれています。

これら江戸城を中心とした江戸の町づくりは家光の時代にほぼ完成したといわれています。その後も、江戸は拡大し続け、京や堺はとっくに追い越し、江戸時代中期（１７００年代）にはパリやロンドンにも匹敵する１００万都市となりました。「大江戸八百八町」という言葉がありますが、実際には１７４８の町があったといわれています。

画像提供：東京都公文書館

ところで「江戸」と呼ばれる地域は、どのあたりなのでしょう？

その地域をはっきりと特定することはできませんが、現在の東京23区とはだいぶ違っているようです。1818年（文政元年）に幕府が発表した「江戸朱引図」というものが残っていますが、それによると東は中川（隅田川）まで、西は神田上水まで、南は目黒川まで、北は荒川・石神井川まで、とあります。

急速に拡大していった江戸ですから、その時代ごとに境界線はさまざまのようです。

明暦の大火によって天守を失った江戸城

時代は戻って、大改修後の江戸城には金箔で飾られた豪華絢爛な天守がありました。ところが、1657年（明暦3年）に起きた明暦の大火によって焼失してしまいます。そしてそれ以後、天守が再建されることはありませんでした。なぜ再建されなかったのでしょうか？

明暦の大火は、その当時の江戸の人口50万人のうち10万人以上が亡くなるという悲惨なものでした。このとき、江戸の復興を指揮したのは会津藩主・保科正之という人物でした。

彼は幕府の権威の象徴である天守の再建よりも、被災者の救済と、大打撃を受けた江戸の町の復興を優先させました。まず住宅の延焼を防ぐために「火除け地」を設置しました。これはある一定区域ごとに広場を設けて火が燃え広がるのを防ぐというもの。現在も残る「広小路」の地名はそれがあった場所です。

また、それまで江戸幕府は警備の面から、隅田川の橋は千住大橋しか認めていませんでした。しかし橋がなく逃げ場を失った江戸町民の多くが大火の犠牲になったことから、新しく両国橋（大橋）を設置しました。

江戸城天守の再建よりも江戸の町の復興を優先させる…保科正之の決断が、その後200年の平和と安定を生み出したともいえます。「天守のない江戸城」は、江戸復興の象徴なのかもしれません。

その後も江戸はたびたび火災に見舞われますが、その多くは照明にロウソクや行灯を使っていたことが原因でした。

時は流れ1868年（明治元年）、江戸城は徳川幕府から明治新政府に明け渡されました。その後は天皇の居城である皇居として現在に至っています。

1882年（明治15年）、銀座に日本ではじめての電灯がともりました。この電気による灯りのおかげで、それ以降、東京が大火災に見舞われることは大きく減りました。まさに文明開化の「灯」がともった瞬間でした。

最後に下欄の夜景写真をご覧いただきたいと思います。これが現在の東京です。徳川家康が入城したときは貧しい漁村に過ぎなかった江戸が、数々の困難を乗り越えて、いまでは世界有数の大都市へと変貌を遂げました。

このすべての明かりの元で働く人々がいることを、そしてこのすべての明かりに電材業界で働く私たちが関わっているのだということを、誇らしく胸に刻みたいものです。

（了）

～江戸の簡易年表～

1457年	太田道灌、江戸城を築城
1590年	徳川家康、江戸城に入城 江戸の町の拡張事業がはじまる
1603年	徳川幕府成立。以降、江戸は政治の中心地となる
1637年	三代将軍・徳川家光の時代に江戸城の改築事業が完成
1657年	明暦の大火によって、江戸の町は大被害を受ける 復旧作業が急ピッチで行われる
1868年	十五代将軍・徳川慶喜が江戸城を退去 明治天皇が入城し、以後皇居となる